漢方で「薬の地産地消」

10年の成果と展望 ―下―

福島医大会津医療センター

栽培安定化へ 研究進む

開所10年を迎えた福島医大会津医療センター（会津若松市）は、開所前は地域になかった診療科を付属病院に設け、会津地方の地域性を生かした医療に取り組む。特に県内初の漢方内科は全国有数の漢方薬をそろえ、会津地方で生産されるオタネニンジン（会津人参）やシャクヤクを活用し、「薬の地産地消」による地場産業の振興にも大きな力を発揮してきた。

桃仁（とうにん）、麻子仁（ましにん）、半夏（はんげ）、人参…。会津医療センターの一角にある漢方調剤室に150種類以上の生薬が並ぶ。種類や量によって無限の調合が可能で、膠原（こうげん）病の治療、外科手術後の症状回復などに活用されている。「コロナ禍前は首都圏からの入院者もいた」。漢方医学講座の三潴（みつま）忠道特任教授（72）はセンターが果たしてきた役割の大きさを語る。

会津地方では江戸時代から、薬用ニンジンのオタネニンジンが栽培されてきた。西洋医学が医療の主流となる一方、国内外で漢方医学の重要性を再認識する機運が高まり、地域の歴史も踏まえて漢方内科が設置された。

だが、漢方薬の原料となる生薬の約9割は中国産。会津では農業人口の減少でオタネニンジン栽培が縮小し、遊休農地が増えていた。地域の生薬栽培を盛んにできないか―。三潴特任教授らは県や農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）、千葉大と共にオタネニンジンの安定的な生産を目指す研究をセンターが開所した2013（平成25）年12月から重ねてきた。通常は5～6年かかる栽培期間の短縮や、生産周期向上に向け栽培1～2年のオタネニンジンの食材活用に関する研究が進んだ。地域内で新たに栽培を始める農家も出てきているという。

只見町で栽培が進むシャクヤクも重要な原料だ。栽培を担う有限責任事業組合クラウドゥ只見の渡部和子さん（72）は漢方薬への活用に加え、県内企業によってシャクヤクを使ったお茶などの商品化も進んでいるとし、「会津医療センターの支援のおかげで活動が広がっている」と地域振興への効果を実感している。

漢方外科や付属研究所漢方医学研究室などで、はり・きゅうの治療にも力を入れ、鍼灸師の研修プログラムもある。三潴特任教授は「在宅医療にも役立つ。県の医療に貢献できる人材を育成したい」と語る。

特色ある診療科は会津地方の中心的な医療を担っている竹田綜合病院、会津中央病院（ともに会津若松市）と互いの特長を生かし、より多くの疾患を地域で診察・治療できる体制につながっている。会津地方初の血液内科もその一つで、郡山市や新潟市などに通院する必要のあった白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの患者の重要な受け皿となっている。

センターは年間約18万人の外来・入院患者を受け入れている。大田雅嗣副センター長兼付属病院長（70）は「10年で築き上げた診療体制を維持し、今後も地域のニーズに的確に応えていく」と誓う。

福島医大会津医療センターの漢方調剤室。150種類以上の生薬が並ぶ